

大和文芸映画祭

黒澤明監督作品

人間の善と悪、生と老、大胆な構成と躍動感あふれる演出で描き続け、世界中の映画人と観客を魅了した黒澤明監督の傑作を上映いたします。

3.10 10:00 開場

10:30~

『酔いどれ天使』

(1948年 東宝)

13:00~

『天国と地獄』

(1963年 東宝=黒澤プロ)

3.11 10:00 開場

10:30~

『羅生門』

(1950年 大映)

14:10~

『生きる』

(1952年 東宝)

13:00~

『黒澤和子
講演会』



場 所：大和市生涯学習センターホール
(小田急江ノ島線・相鉄線 大和駅下車 徒歩10分)

鑑賞券：10日鑑賞券 500円
11日鑑賞券 1,000円
(全席自由、入退場自由)

12月21日(水) 販売開始

※未就学児入場不可

※鑑賞券が完売した場合、当日の入場はできません。あらかじめご了承ください。

主催：大和市/文化庁/東京国立近代美術館フィルムセンター

主管：公益財団法人大和市スポーツ・よか・みどり財団

協力：株式会社オーエムシー

鑑賞券販売所

相鉄大和駅グリーンぼけっと	046-264-8222
ミュージックショップダイエー(桜ヶ丘)	046-267-4045
明和堂書店(南林間)	046-276-2220
大和市役所(2階文化振興課)	046-260-5222
生涯学習センター	046-261-0491
つきみ野学習センター	046-275-0088
林間学習センター	046-274-4361
桜丘学習センター	046-269-0411
渋谷学習センター	046-267-2027
大和市老人クラブ連合会	046-260-5654
大和スポーツセンター	046-261-6200
グリーンアップセンター	046-263-8711
引地台温水プール	046-260-5757
引地台野球場(総務企画担当)	046-260-5305

お問い合わせ



公益財団法人 大和市スポーツ・よか・みどり財団
電話 046-260-5305

詳しくは財団ホームページをご覧ください。
<http://www.yamato-zaidan.or.jp>

やまとナビ で 検索



酔いどれ天使

1948年 東宝/白黒 スタンダード 98分
出演: 志村喬/三船敏郎/山本礼三郎 ほか

3/10㊥上映

戦時中、『姿三四郎』(1943)で鮮烈なデビューを果たした黒澤明監督は、戦後も『わが青春に悔いなし』(1946)や『素晴らしき日曜日』(1947)の成功で、日本映画の若きエース的存在となった。「キネマ旬報」ベストワンに輝いた黒澤の7作目にあたるこの作品は、闇市のヤクザと飲んだくれの貧乏医者との、不思議な友情と葛藤を描いたもので、強烈な個性を持つ若者とその観察者の設定や荒々しい映像表現の顕著さという点で、以後の黒澤映画のスタイルを決定づけたものと言える。前年に、谷口千吉監督の『銀嶺の果て』(黒澤脚本)でデビューしたばかりの三船敏郎が黒澤に初めて起用され、野生味あふれるその個性をいかんなく発揮し、以後の黒澤作品に欠かせぬ存在となったことは周知の通り。また、映像と音との対位的表現(雑踏の中の<カッコー・ワルツ>の使用やギター曲<人殺しの歌>など)を試みた黒澤にとって、この作品から参加した音楽家早坂文雄との出会いも幸運であった。



天国と地獄

1963年 東宝=黒澤プロ/白黒 シネマスコープ 143分
出演: 三船敏郎/仲代達矢/香川京子 ほか

3/10㊥上映

この作品は、アメリカの推理作家エド・マクベインの「キングの身代金」を映画化したものであるが、連れ去る子供を取り違えたとしても、その犯人の脅迫は成立するとのヒントを借りただけで、ほとんどのトリックは黒澤をはじめとする脚本家たちのアイデアである。この映画のクライマックスは二つある。一つは特急こだまのトイレの窓から身代金の3000万円を投げ出す場面。これは実際運行される車両を借り切って、数台のカメラで同時間に撮影された。もう一つは、極刑を課すために犯人を泳がせ、新たな殺人現場におびき出す場面である。『用心棒』(1961)や『椿三十郎』(1962)で、これまでの時代劇にはなかった迫力を演出した黒澤であったが、この作品でも、サスペンス映画に斬新な演出を試みている。<天国>に住む富豪と対照的に<地獄>に住む青年医師を演じた山崎努は、文学座の新人俳優であったが、この作品で一躍注目を浴びた。「キネマ旬報」ベストテン第2位。



羅生門

1950年 大映(京都)/白黒 スタンダード 88分
出演: 三船敏郎/京マチ子/志村喬 ほか

3/11㊥上映

黒澤は本作について次のように述懐している。「この作品の根本といえば、要するに、無声映画に帰ってみようと思ったことですね。……トーキーになって失われた映画の美しさをもう一度見つけようという気持ちだった。……映画ももう一度単純化しなければならないのじゃないか、というのがあの試みだった」。森の中でおきた殺人事件をめぐる、8人だけの登場人物で演じられる不条理劇。芥川龍之介の「藪の中」を、脚本家を志望していた橋本忍が脚色、黒澤の助言で同じ作家の「羅生門」が加えられた。絶対真理の不在と人間不信の主題は戦後間もない欧米で評価され、翌年のヴェネチア国際映画祭でグランプリ、そして米・アカデミー最優秀外国語映画賞を受賞した。1949年に湯川秀樹博士がノーベル賞を受賞し、敗戦後の日本に朗報をもたらしたが、黒澤のそれも日本映画の芸術水準の高さを海外に知らしめただけでなく、わが国の国際理解に大きく貢献した。「キネマ旬報」ベストテン第5位。



生きる

1952年 東宝/白黒 スタンダード 143分
出演: 志村喬/小田切みき/田中春男 ほか

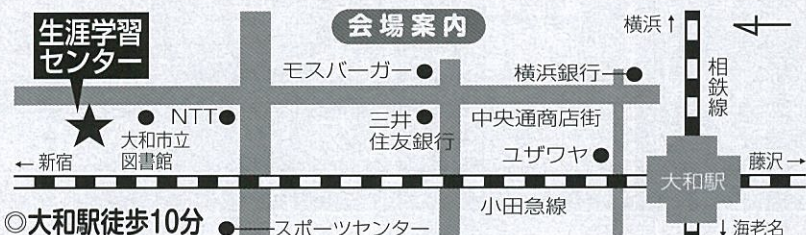
3/11㊥上映

それまで無気力に生きてきた一人の中年男が、死という絶対的なものを目前にして、自分を見つめ直し、人間としての尊厳をとりもどしていく姿を描いた作品である。冒頭に主人公が胃癌であることが唐突に語られる。一人息子に相談しようとしても取り合ってもらえず、夜の街をさまよっては見知らぬ男と暴飲に明け暮れるが、町工場への転職を願う部下の女事務員の言葉が、この男の生き方を変えはじめた。そこで場面は男の通夜へと突然変わり、参加者の回想により、男のそれまでの行動が断片的に描かれる。結局、この男が成し遂げたのは、町の住民が陳情していた下水の整備と公園の建設であった。ともすれば安易なストーリー展開に流れやすい題材であるが、回想形式によって、事実と真実の多面性を描くことに成功したのが、この作品の特徴であろう。主演を演じた志村喬の<ゴンドラの歌>が感動的。「キネマ旬報」ベストテン第1位、そしてベルリン国際映画祭で銀熊賞を受賞。

黒澤 和子 profile

3/11㊥ 講演

1954年、黒澤明の長女として東京に生まれる。サン・デザイン研究所でスタイリストの勉強をした後、伊東衣服研究所デザイン科でファッションデザインを学ぶ。ファッション関係の仕事に従事した後、株式会社黒澤プロダクションで父の秘書的仕事をする。父の作品「夢」の時、父の進言で映画の世界に入り黒澤明監督作品を3本担当、「汚し」のテクニックの評価が高く、数々の時代劇・現代劇問わず様々な衣裳デザインを担当。作品には「座頭市」、「たそがれ清兵衛」、「雨あがる」、「最後の忠臣蔵」、「一命」等の衣裳デザインを担当し、映画衣裳デザイナーとして活躍している。父との日々を書いた「パパ黒澤明」他、何冊かの本も出版している。



お問い合わせ
公益財団法人和南市スポーツ・よか・みどり財団
電話 **046-260-5305**

詳しくはホームページをご覧ください
<http://www.yamato-zaidan.or.jp>

駐車場に限りがありますので公共の交通機関等をご利用ください。

やまとナビ で 検索